

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K14997

研究課題名(和文)キュレーションの実践による農山村の自然・文化資源享受能力の再生

研究課題名(英文)Regeneration of ability to receive natural and cultural resources on rural area by curation practice

研究代表者

奥 敬一 (Oku, Hirokazu)

富山大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：60353629

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：調査地や先進事例などにおける享受能力再生のためのキュレーション実践の試みから、地域資源の「編集(キュレーション)効果」が存在することを示した。これは人的資源と地域資源の融合で新たな価値が生まれる状態である。調査対象地域では住民主体で運営する人材育成機関の設立構想が進められている。この事業の中で、地域住民が本来持っていた資源享受能力を、「編集効果」で次世代や移住希望者に継承するためのプログラムとして実践的ワークショップ「森の暮らし塾」を実践した。山村振興にとって有効なプログラムであることが地域に認識され、次年度以降も拡張して継続されることとなった。

研究成果の概要(英文)：From attempts to curation practice for the regeneration of ability to receive natural and cultural resources in the study area and advanced cases, it showed that there is "Editing (curation) effect" of local resources. This is a state where new value is created by fusion of human resources and regional resources. In our study area, the idea of establishing a human resource development institution organized by the residents is promoted. In this project, a practical workshop "Forest Livelihood School" as a program to inherit the ability to receive natural and cultural resources originally owned by the local residents to the next generation and migrant applicants by "editing effect". The community recognized that it is an effective program for village promotion, and this workshop will be expanded and continued after the next fiscal year.

研究分野：風景学

キーワード：享受能力 自然資源 文化資源 継承 自治制度

1. 研究開始当初の背景

農山村域における人口減少と高齢化の進展は、確かに地域社会の衰退を招き、里山に代表される自然環境の劣化をもたらしてきたが、それは農山村域の自然・社会的資源が無価値になることとイコールではない。むしろ東日本大震災以降の国内のエネルギーをとりまく状況や、都市でのいびつな社会への負荷を顧みれば、農山村域の自然・社会的資源にこそ目を向け直す必要があり、これらの地域資源を適切に「使い直す」ことが、生態系の持続性にとっても、社会の文化の維持にとっても求められている。

では、このような現代社会の中での地域資源の「使い直し」にはどのようなプロセスを経る必要があるのだろうか。環境政治学者の佐藤*は「資源」を「働きかけの対象となる可能性の束」と定義づけている。つまり人間の側から技術、文化、制度を通した働きかけがあってはじめて、「資源」は実際に人が利用し得る「財」へと変換され、経済的・非経済的効用・利益を生み出すことになる。この「資源」を「財」へと変換するための働きかけに関連して、奥**は生態系サービスを「享受する能力」に着目し、「人や社会が生態系の構成要素から、意味や価値、財を引き出す技術・思想などの体系」として定義した。これには生業などに関連する伝統知だけではなく、精神文化的な意味付けや、近年の技術による能力も含まれる。そして、享受能力の変化が農山村生態系の劣化メカニズムに影響していることを示した上で、地域社会が本来持っていた享受能力を再生させることが、農山村に賦存する「資源」の価値や意味の回復にとって有効な手段になり得るとした。

*佐藤仁(2008)資源を見る眼-現場からの分配論.東信堂

**奥敬一(2013)里山林の生態系サービスを発揮するための課題と農村計画の役割、農村計画学会誌 32(1):20-23

2. 研究の目的

本研究課題では、視覚芸術分野で作品の解釈、選択、構成、展示といった一連の行為を意味する「キュレーション」概念を用いて、上記のような資源と享受能力との関係性がはらむ問題点を解決する学際的研究を実施する。資源の価値を可視化し社会に効果的に提示する技術において、芸術学、博物館学分野は秀でており、キュレーションによる資源価値の社会への再提示によって、農山村における資源享受能力の再生を試みるのが本課題の大きな目的である。具体的には以下のような個別の研究目的を設定し、実証的・実践的な調査を実施する。

- ・地域資源の享受能力に関する問題構造の明確化
- ・享受能力の低下によって埋没した資源、制度の再評価

- ・キュレーション行為による埋没した地域資源の社会への再提示と「財」化実践
- ・キュレーションによる地域資源享受能力再生方策の理論化

3. 研究の方法

研究の対象地域は、主に富山県西部の中山間地域とする。

(1) 自然資源に対する享受能力の再生

地域住民に対する聞き取り調査や文献資料調査をもとに、林野を中心とした自然資源を認識し利用するための能力が、時代の変遷と共にどのように変化してきたのかを明らかにするとともに、享受能力低下や継承の困難性に関する問題構造を把握する。また、享受能力が低下したことによって地域社会の中で埋没してしまった自然資源をデータベース化し、そこから現代的な価値をもつものを発掘し再評価を行う。工芸材料や生活資材、生薬原料となる樹木や草本などの生物資源を主な対象とする。また、資源の現存量や持続性についても定量的な評価を行う。そして、再評価可能な自然資源を財として活用するため、地域住民を交えたワークショップや展示行為により、再評価された資源への認識を高め、その価値の享受能力の再生を支援する。またキュレーション行為により、適切な価値評価を伴った情報発信・提示の方法と、現地での提供手段の検討を行う。

(2) 文化資源に対する享受能力の再生

地域住民に対する聞き取り調査や文献資料調査をもとに、民俗文化資源を認識し利用するための能力が、時代の変遷と共にどのように変化してきたのかを明らかにするとともに、享受能力低下や継承の困難性に関する問題構造を把握する。また、享受能力が低下したことによって利用されなくなった文化資源をデータベース化し、そこから現代的な価値をもつものを発掘し再評価を行う。富山県西部地域では麦屋節、こきりこ節などの民謡文化は高い評価を得ているが、それら以外の民俗文化については十分な評価が行われておらず、早急な調査が求められる。対象地域の全集落に対する悉皆アンケート調査などによる実態把握を行う。そして、再評価可能な文化資源を財として活用するため、地域住民を交えたワークショップにより、再評価された資源への認識を高め、その価値の享受能力の再生を支援する。例えば見過ごされてきた民俗芸能や風景体験などが対象として考えられる。また適切な価値評価を伴った情報発信の方法と、現地での提供手段の検討を行う。

自然・文化資源の維持を担ってきた伝統的な地域社会の制度について、その機能と態様をヒアリングや史料調査をもとに把握するとともに、時代変化の状況を明らかにする。また、人口減少と高齢化の進展によって過小評価されがちな伝統的自治や資源管理の制度を、現代的な視点から再評価し、現代社会

に接続した活用と仕組みの強化を検討する。例えば、集落の様々な共同作業を支えてきた「結い」システムを現代的な資源利用に活かすための方策などを検討する。

(3) キュレーションによる享受能力再生方策の理論化

一旦放棄された農山村の資源を再評価し、新たな形態で活用している各地の先進的な事例について調査を行う。

地域の自然・文化資源に対する、地域住民を巻きこんだ一連のキュレーション行為により、享受能力が再生される過程について、実践的研究の総括を行うとともに、富山県西部地域でのケーススタディと各地での事例調査をもとにした理論化を行う。

4. 研究成果

(1) 自然資源に対する享受能力の再生

利賀地域の自然資源利用について調査を行い、伝統的な自然資源享受の形態と近年の移住者によって発掘された新たな自然資源享受の状況について把握した。伝統的な森林資源の利用技術については多くが次世代に伝えられておらず、一部の林業関係者などが伝聞として知っている状態にとどまっていた。伝統的林業の時代を知る年配者への聞き取りから映像資料を作成した。一方で、新たな利用形態としてクロモジの香りをいかしたお茶やエッセンスオイルとしての利用、カエデ類を活用した春先のメイプルシロップ採取などが展開していることが明らかとなった。

また、利賀地域では地域の自然資源をいかした環境林業を地域に根付かせるため、住民主体で運営する人材育成機関「森の大学校(仮称)」を構想し設立準備を始めている。この構想の中で自然からのサービスの享受能力を継承する取り組みが始められており、新たな継承手段として注目できる。

(2) 文化資源に対する享受能力の再生

南砺市域における文化資源について、市史および旧町村史をもとに網羅的に調査を行った。そのうち特に当該地域に共通する伝統祭事である獅子舞行事について悉皆調査を行い、継承や廃絶、祭事の変化の状況について把握した。富山県南砺市旧8町村の町村史から、文化資源に関連する項目をピックアップし概要をまとめた。これをもとに文化資源の分類を試案し、富山県南砺市旧町村史データベース(6,634件)を作成した。また、獅子舞悉皆調査資料をもとに、映像資料を2本制作した。さらに、南砺市文化・世界遺産課と共同で行った南砺市文化資源アンケート調査をもとに、文化資源地図5枚を試作した。これをきっかけに、南砺市との受託研究(研究課題「南砺市文化資源研究」)が実現し、地域内で文化資源享受の再生を試みる動きが広がった。

世界遺産五箇山をとりまく平地域では、総有意識と信仰文化を基盤とした自治制度が

残されている。こうした自治制度が現代的な視点から再評価できることを示した。

(3) キュレーションによる享受能力再生方策の理論化

他地域事例調査

長野県信濃大町を舞台とする「北アルプス国際芸術祭2017」の調査では、宿場町としての歴史や民話、温泉郷や鷹狩山など地域の自然資源(水・木・土・空)、市街地の空き家や空き店舗などを活用した作品を通して、それらが地域の様々な資源の価値と魅力を引き出している実態について明らかにした。札幌国際芸術祭2017の、石山緑地を舞台とする音楽パフォーマンスは、芸術と地域資源をつなぎ、現代の人々が享受する新たな価値を生み出すキュレーションの良好な事例となっていた。これらは、「再評価された自然資源の『財』化実践」の事例調査であったが、地域芸術祭という期間限定的な取り組みを通じて、地域の資源を継続的な「財」へと発展していくために必要となるものや、そのプロセスを解明するためには、今後さらに継続的な調査が必要である。

北海道登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」の活動概要、および同センターをささえるNPOの運営概要(設立経緯、ボランティアの人材育成による地域活性化)に関する情報収集を行った。農山村資源の再評価として従来から展開されてきた、鉱山跡地の廃校利用による自然体験事業、環境保全型事業(里山づくり等)を発展させ、コミュニティを基盤として様々な主体が集う拠点となりうる場所づくりによる、地域課題解決型地域づくりに関わる事業(子育て支援活動等)といった、新たな形態での農山村資源の再評価の取り組みを行っていた。伊藤園は耕作放棄地などの農山村資源を再評価した茶産地育成事業により、高齢化や後継者不足に悩む茶産地農家の課題解決や耕作放棄地保全の成功を自社の企業価値向上に結びつけていた。東京農業大学オホーツクキャンパスでは、農山村資源の再評価による新形態での取り組みとして、オホーツク学、エゾシカ学などのカリキュラム開発によりフードマイスターを育成し、25プロジェクト、46商品開発といった実績を有する「ものづくり・ビジネス地域創生塾」における地域再生人材育成による地域イノベーション創出を行っていた。これらの農山村資源の再評価による「自然体験型事業」や「里山づくりなどの環境保全型事業」において、スタッフが自分たちで自発的に考え、話し合い、解決に向けた活動に取り組むとともに、多様な主体が連携し、知恵やアイデアを出し合い実際の活動に醸成する過程で、地域活性化の新たな形態の可能性を見出すことができた。また、こうした過程を生み出す新たな場(サードプレイス)の形成には、地域が自発的に地域活性化への取り組みに向けたCSV経営、SDGsの展開や、地域との相互作用による共創・共育・共感シ

STEM構築など、新たな公の展開による共助社会の構築、地域再生人材育成による地域イノベーション創出に資する事業モデルとしての地域づくりの新機軸の活用が必要である。

総括と新たな展開

調査地や先進事例などにおける享受能力再生のためのキュレーション実践の試みからは、地域資源の「編集（キュレーション）効果」が存在することが示された。これは人的資源と地域資源の融合で新たな価値が生まみ出されていく状態である。このとき、失われつつある自然資源や文化資源の享受能力を整理し再生することは、近代化による発展の「ものさし」とは異なる、地域の豊かさの「ものさし」を提供することにほかならない。この「編集効果」を高めることは、暮らしの質を高め、移住・定住を促すことにもつながっていくと言える。

利賀地域では住民主体で運営する人材育成機関「森の大学校（仮称）」の設立構想が進められている。この事業の中で、享受能力再生のための実践的ワークショップとして「森の暮らし塾」を春夏秋冬の4回実施し、本研究で把握した伝統的な自然資源享受の形態と近年の移住者によって発掘された新たな自然資源享受の形態をもとに、地域住民が本来持っていた資源享受能力を、次世代や移住希望者に継承するためのプログラムとして実践した。参加者からは実践的な技術指導によって資源活用の方法が理解できたことに高い評価が得られた。また、移住を考える参加者からは、生活していく上での自信が深まる効果もみられた。さらに、こうした人材育成方法が、山村振興にとって有効なプログラムであることが地域に認識され、次年度以降も連続して月一回程度開催する講座に拡張して継続されることとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計11件)

深町加津枝・奥敬一(2016)大津市比良山麓の自然資源利用と里山暮らしの価値に関する考察：景観生態学 21：33-41、査読有

奥敬一(2016)シリーズ林業遺産紀行 越前オウレンの栽培技術：森林科学 78：26-27、査読無

奥敬一(2016)森林・林業と文化的景観：季刊森林総研 36：6-7、査読無

奥敬一(2017)NPOが森林管理に果たす役割と可能性：グリーン・エージ 520：4-7、査読無

古池嘉和(2017)世界遺産制度と地域行政のあり方について：日本文化政策学会第10回年次研究大会予稿集：177-180、査読無

奥敬一(2018)民家の価値をひきだす里山と農の循環：地域開発 624：46-49、査読無

奥敬一(2018)シリーズ林業遺産紀行 若狭地域に継承された研磨炭の製炭技術：森

林科学 82：32-33、査読無

石灰希・深町加津枝・奥敬一・柴田昌三(2018)砺波平野の屋敷林に対する住民の認識と保全のための対応策：ランドスケープ研究 81(5)：549-552、査読有

西田凌吾・小松亜紀子・塩見一三男・金岡省吾・市村恒士(2018)地域イノベーション創出に向けた人的交流拠点としての自然体験施設のマネジメント：ランドスケープ研究 81(5)：589-594、査読有

古池嘉和(2018)人が移り住むということー愛知県豊田市を例にー：高岡芸術文化都市構想 都萬麻 01：54-62、査読有

松田愛(2018)キュレーションのつくるまちの魅力ー北アルプス国際芸術祭2017を事例にー：高岡芸術文化都市構想 都萬麻 01：94-107 査読有

〔学会発表〕(計3件)

奥敬一(2017)景観をどのように理解するか：金沢大学地域政策研究センター国際シンポジウム「暮らしと自然と文化的景観」浦本咲・大橋由希・小幡侑花・鈴木駿太・名古屋拓海・濱田楓・奥敬一(2018)南砺市富山干柿の文化的景観とその活用：文化的景観研究集会(第9回) 地域らしさを支える土木-文化的景観における公共事業の整え方

王聞・深町加津枝・奥敬一(2018)砺波平野における今日の屋敷林の構成と利用形態：第129回森林学会大会

〔その他〕

島添貴美子(2018)富山県南砺市旧町村史データベース(6,634件)

島添貴美子(2018)獅子舞映像資料2本(大鋸屋獅子舞、土生新上野獅子舞)

奥敬一(2018)林業従事者への聞き取りによる映像資料1本

6. 研究組織

(1)研究代表者

奥敬一(Oku, Hirokazu)

富山大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：60353629

(2)研究分担者

古池嘉和(Koike, Yoshikazu)

名古屋学院大学・現代社会学部・教授

研究者番号：50340063

金岡省吾(Kanaoka, Shogo)

富山大学・地域連携推進機構・教授

研究者番号：00444191

伏見裕利(Fushimi, Hirotoshi)

富山大学・和漢医薬学総合研究所・准教授

研究者番号：30313620

島添 貴美子 (Shimazoe, Kimiko)
富山大学・芸術文化学部・准教授
研究者番号：00432120

松田 愛 (Matsuda, Ai)
富山大学・芸術文化学部・講師
研究者番号：40722260